

環境学を展望して6件の研究を報告

—第19回研究報告会開催—

去る1月25日(金)、当財団と環境学研究フォーラムの共催により、東京六本木の国際文化会館において第19回の研究報告会が開かれた。テーマは「環境学の展望と課題」。午前中3件の報告があり、引続いて「環境問題と環境学の未来像」をテーマに総合討論が行われた。

トヨタ財団では毎年2～3回、いくつかの助成研究を中心とした研究報告会を開催している。今回は昭和57年度に環境領域で2ヶ年一括助成を行ったものの中から生物、生態に関係のあるものを中心に報告していただいた。

午前の部では、東京大学理学部長の江上信雄教授の司会により、「水環境におけるユスリカの役割(佐々学)」、フロアーからも活発な議論が



助成財団資料センター設立の検討委員会開催

昨年7月に22の有志財団関係者が集まって発足した助成財団資料センター設立検討委員会(委員長 林雄二郎 当財団専務理事)は、去る2月12日(日)、東京六本木の国際文化会館で第3回の委員会を開催した。当日は、西ドイツ、イギリス、オランダの財団資料センターの実情について報告があった後、幹事会で検討を進めてきた資料センターの構想概要について報告があり、その実現の問題点等に関し、熱心な討論が行われた。今後さらに検討をすすめる、4月開催予定の次回委員会で何らかの方針を出す予定になっている。

目次

◆ 助成財団のこれから……………	2
◆ 環境問題と環境学の未来像……………	3
◆ 助成刊行物紹介……………	4
◆ ヨーロッパの主要な民間助成財団……………	5
◆ 新刊案内、最近の研究報告書から……………	6

「ハシボソミズナギドリ大量斃死の原因究明(黒田長久)」、「不知火海の環境変化(原田正純)」に関する報告が行われた。

午後の部では、帝京大学医学部の大井玄教授の司会により、「スパイクタイヤ車粉塵の環境汚染(山科俊郎、山科正平)」、「微粉炭フライアッシュの生物影響(児玉泰)」、「環境中の変異原物質の危険度・安全度(佐藤茂秋)」に関する報告が行われた。

続いての総合討論は国立公衆衛生院の山根登氏の司会により、江上信雄、大井玄、鈴木継美、土井陸雄、立川涼の各氏をパネラーとして行われた。この討論の要点は山根先生にまとめていただいたのでご参照いただきたい。

(本レポート3P)

当日は専門を異にする約100名の方々が出席された。

研究助成の公募は4月1日からの予定

1985年度の事業計画については3月7日開催の第37回理事会で審議・決定される予定であるが、事務局では、昨年度に準じた形で研究助成の公募を行うべく、現在準備をすすめている。応募要項等ご希望の方は240円切手同封の上、財団事務局研究助成係までお申し込みいただきたい。関連書類ができ次第お送りする予定である。



助成財団のこれから

事務局長 山口日出夫

I 鳴り砂の研究会の舞台になっているその砂浜は、想像していたよりもずうっと小さく弱々しく、大きな波に一呑みにされそうな浜であった。すこし注意して踏みしめないと音を聞くことが出来なかったが綺麗な音を発していた。この研究会の人達が鳴り砂の保護を中心として美しい自然を守るための研究活動にかり立てられたのも当然に思えた。

違う日、都会の遊び場の研究会を訪ねた。会の事務所へ行く道は「昔の農道が整理されないままですから」との事であったが、火事が起っても消防車の入れないような場所であった。すこしでも自然が残っていたらと思わせるような所で研究の必要性を痛い程感じさせられた。

トヨタ財団の研究コンクール“身近な環境をみつめよう”の研究現場を訪ねた時の印象である。この研究コンクールは、地域に生活する人々と専門家の組み合わせが特色になっている。従来の専門家だけによる研究とは違い、はじめはそれほど明確な問題意識をもっていなかった人達が、研究活動を通じて成長し、メンバー相互の信頼感も高まり、それと同時に研究の成果もあがる。他面ではその成果を実際の街づくりや自然保護の活動に反映させるといった展開をみせている。まちの小さな研究会ではあるが、様々なことが凝縮されており時代の流れを感じる。これからの社会のあり方について貴重な示唆を学びとることができる。

財団が助成活動を通じて社会に貢献するという事は、まさにこのような新しい動きをいかに評価し適確な対応が出来るかどうかにかかっている。そのためには常に変革に対応できる感性を磨いておくことが必要である。

II 近頃は財団活動に関心をもつ人も増え、時には財団の設立について相談をうけることがある。その分野では練達の経営者であるその人は「事業も区切りを迎えることだし、それに税金は、何に費われるか、もうひとつはつきりしないので、何かやってみたいんです。いまままでお世話になった学者の方々に研究費を贈るとか、近辺の学生に奨学金を贈るとか…」いろいろ話してみると同じ業界やその地域に最近出来た財団について知らなかった。こんな時、いま検討中の助成財団資料センター

でもあれば、役立つのではなからうかと思った。

ことしの正月、NHKテレビで市民運動についての番組をみた。市民運動に参加している若い人達のおこなっている、街づくり、過疎の村おこし、リサイクル運動、森林愛護等々が紹介された。その活動自体はもちろん素晴しかったが、活動のすすめ方について教えられた。

街づくり運動に参加する女性は、みんなは自分を表現できる場所を求めている。いままでは、わき役人生が多過ぎたのでは、といていた。また他の人達からは、この活動で社会を変えようとは思っていない、きっかけづくりになれば良いと思っている。また市民活動をやってほしいとは思いが強制は出来ないなどの意見が出ていた。

わが国にはボランティアの伝統がなく、宗教にもとづく奉仕の精神にも欠けているので、アメリカのような財団は育ちにくいのではとよく言われる。いちがいにそのように決めつけてよいものだろうか。それどころかようやく生活のゆとりが増え、人生の生きがいや生活の質を考えるようになった昨今は、まさに財団活動の活発化に、格好の場を提供してくれているといえないか。

III 昨秋、当財団が主催した、国際シンポジウム「これからの民間助成財団」に参加した欧米の財団関係者は、日本の財団が非常に真摯に財団活動に取り組んでいることを高く評価していた。それは日本の国内で財団に寄せられる評価を凌いでいた。財団活動の規模を日米間で比較した場合、比較にならないほど日本のそれは劣る。しかし個々の財団における活動の質には見るべきものがあるということになろうか。財団活動は、これまでの外来文化がそうであったように、日本の風土にたくみに適応しつつ発展する可能性をもっているのかもしれない。

財団活動を活発にするためには法制、税制など各方面での整備がまたれるところである。しかし財団自身がまず手をつけるべきことは財団がよくみえるようにすることであろう。端的には“財団資料センター”のような組織ができることとよい。よくみえるようになれば自然と人々は財団に注目するようになるだろう。そうすれば理解も増してくる。いまのように見えにくい状態では事態はなかなか変わらない。すくなくとも財団活動をエンカレッジするには程遠い。多くの人が情報を求めてくるようになれば、逆に社会のニーズを把握できるようになろう。財団同士の勉強もし易くなる。財団活動にはまだまだ可能性がある。一層の発展を期したいものである。



環境問題と環境学の未来像

—第19回研究報告会の総合討論から—

環境学研究フォーラム代表 山県 登

(去る1月24日(金)に開催された研究報告会での総合討論の要点を、当日の司会を担当された山県登氏にとりまとめていただきました。)

〈研究報告に関連して〉

まず江上信雄氏から研究報告Iについて、発表された3つの課題は視点こそちがえ、問題に取組む使命感、危機感といった共通の情熱をもっていること、また生物の定量的な扱いの重要性を示していること、が強調された。これに対し司会者から、定量も理化学的なものは易しいが、たとえばユスリカの種の同定を顕微鏡でやるのは素人にできるか、どれくらい時間がかかるのかという疑問が提出され、国立公害研究所の安野正之氏は、生物の指標性について、アラーム、現在どうなっているか、そしてaccumulatorの3つの役割があり、目的によって適したものを選ぶ必要があると述べた。帝京大学医学部の大井玄氏からも生物指標を使ううえで大切なことはその限界を知ることであると、また会場からは好塩性その他についてそれぞれ指標種が当てはめられたとしても、水を調べれば簡単にわかる場合にわざわざ顕微鏡を持ち出すこともあるまいとの発言があった。

討論者左より山県、鈴木、大井の各氏



愛媛大学農学部の立川涼氏からは、中低位の生物なら話は比較的簡単だがイルカのような高等脊椎動物になると、体内における生活史に伴う物質移動が複雑で、鳥類の渡りではDDTの体内レベルが数倍から20倍にもなること、欧州ではおそらく膨大な博物学の蓄積があるがわが国ではその蓄積が少ないので、今後は環境博物学をもう少し地道にやる必要があると指摘があった。東京大学医学部の鈴木継美氏はこれに反論してただの博物学で良いのではないかとした。これに関連し旭川医大の土井隆雄氏は有機塩素系農薬による猛禽類の卵への影響(こわれ易くなる)はイギリスでは1900年代の初めから卵殻指数の観察があったことは博物学の伝統を示すものであるとした。

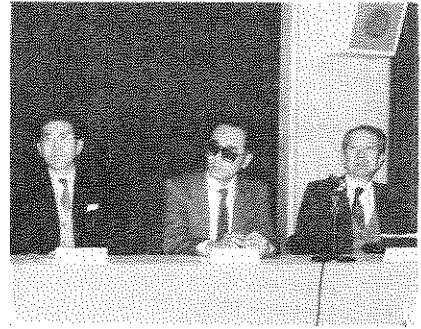
研究報告IIについては、大井氏から、疾病の発現や目に見えて環境が変わるといった第1段階の環境問題は第2の段階に入り、発表された3つの報告はいずれもこれに相当するとし、難しい問題としては人間がpureでない状況で生活しているため因子の重なりが生じ、dose-responseをきめたり、危険(リスク)を定量化するのが困難であるとの指摘があった。立川氏はリスクアセスメントで欠けている情報は場所によってちがうexposureのデータであると述べた。発がん問題については専門家ばかりではない参会者の興味が集まったが、無数の変異原の中でわれわれが生活していることや、その物自体が発がん性がなくともpromoterとして働くものがあることなどが紹介され、焼き魚と煮魚とどちらが安全かといった身近な話題に発展し、放送教育開発センターの黒川良康氏からは、発がんの事実を受取る人の側から

の問題としてとらえること、マスコミの態度なども環境学の中に組みこんでおくことの必要なことが指摘された。

〈民間財団として助成のあるべき姿は?〉

まず司会者から環境庁が昨年11月に出した報告書(環境汚染構造等予測調査)について簡単に紹介され、今後10年間の環境問題は現在すでに起っていることの延長と考えてよいとの前提のもとに、民間財団としての助成の方向について広く会場から意見を徴したところ、概ねつぎのような意見が出された。

左より立川、土井、江上の各氏



国の縦割り行政では対処しきれない、省庁にまたがる非常にマクロな問題、学会すら縦割りである大気、水、土壌などにまたがるマルチメディアな問題(これは同時にそのような研究を育てる組織も必要)、近代化の波の影響を受けている開発途上国で日本の若い人たちが腰を落ちつけて問題と取組めるようにする、また問題と取組む情熱を高く買う必要がある、予備研究といった小口のを沢山採用しチェックしてその中から進める価値があれば助成すること、生物の観察を長期にわたって援助、現状は3年やったら別のテーマに移らなければならない、行政では問題が解決したと思ったらその後何もしいがアフターケアの問題が大切、etc。

最初は2時間の討論は間のびするのではないかと懸念したが、実際には多くの意見がとびかい、時間不足の観であった。



助成刊行物紹介

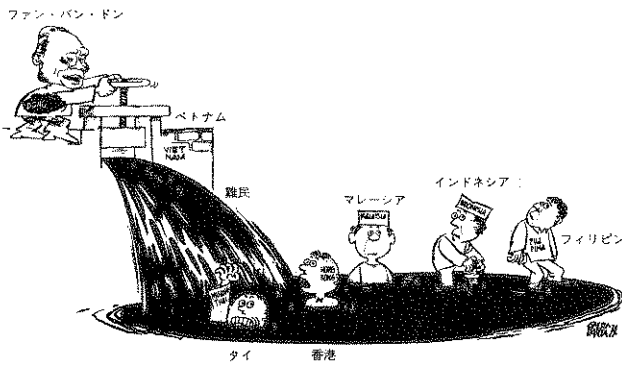
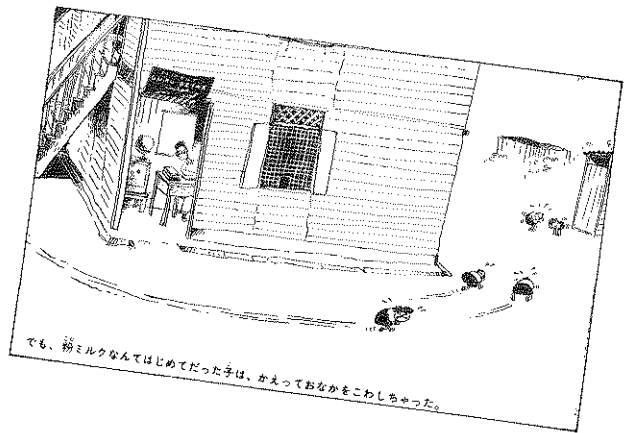
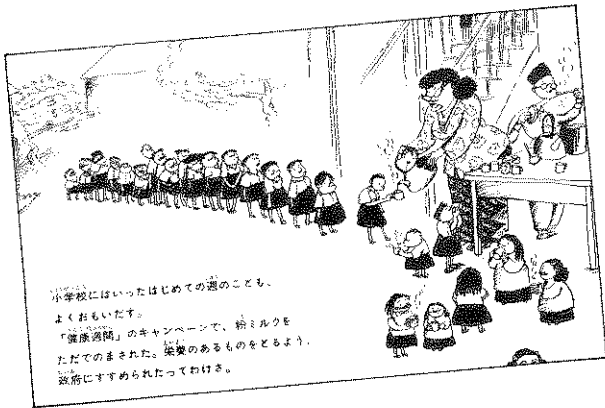
東南アジアのマンガ②

カンボンのガキ大将

ラット作 萩島早苗, 末吉美栄子訳
 晶文社刊 1600円
 B5判 横とじ 155頁

マレーシアでカンボンというのは村のことだそう。日本語のむらということばに郷愁をさそう響きがあるように、カンボンということばにもなつかしいふるさとのにおいがあるらしい。作者ラットはそんなカンボンに生まれ育った。そして、自分の幼い日々の思い出を村の人

々の生活とともにつづったのがこの作品だ。家のまわりのゴム園。そのむこうのスズ採掘現場。イスラム教のコーラン塾。川底にしかけた魚とりの仕掛。小学校。それに割礼の儀式。中学校の受験。都会へのひっこし…1ページに1枚という絵本仕立てのひとつひとつの絵の中には、大人になって忘れてしまったなつかしい世界がある。子供の世界をこれだけ詩情豊かに描ける人はまずいない。マレーシアでこの本がベストセラーになったこともうなずけるし、かの地の「隣プロ」のアドバイザーの方々が日本語への翻訳を薦めてくれた気持もわかる気がした。



パシコムおじさん—マンガでみる現代インドネシア—

G.M.スダルタ作 村井吉敬訳
 新宿書房刊 2000円
 B6変型判 449頁

作者スダルタがインドネシアの新聞「コンパス」にひとこまマンガを描きはじめたのは1967年。以来、10数年描きつづけてきた作品を集めたのがこの本で、原題は「インドネシア1967~1980」という。邦題にあるパシコムおじさんは彼の作品によく登場するキャラクターからとったもの。新聞のひとこまマンガに世相が凝縮されているのはどの国でも同じことで、副題の「マンガでみる現代インドネシア」とはまさにその通り。ただし、絵を見てすぐ笑えるのは相当のインドネシア通で、そうでない人のため、作者や訳者によるていねいな脚注がつけられている。

1979年6月13日

213
13 JUNI 1979

- ベトナムから難民の洪水。とりしきっている者がいる？
- ◆——ASEAN 諸国は、ベトナム難民で結束を固めた。しかし、現在はベトナムの存在を前向きに認めようとするインドネシア、マレーシアとタイ、シンガポールとのあいだに亀裂が生じつつある。

「隣人をよく知ろう」プログラム



ヨーロッパの主要な民間助成財団

国際部門 若山佳子

トヨタ財団レポートNo.27でアメリカの民間助成財団によるアジア関連の助成について紹介したが、今回はヨーロッパの財団を対象として、同様のインタビューを行う機会があった。

今回訪れた国は、イギリス、オランダ、ドイツの3カ国であった。これらの国を選んだのは、ヨーロッパの中でもこれら3カ国で民間助成財団の活動が比較的活発であるという事情による。

民間助成財団を含むチャリティーの伝統はヨーロッパで生れ、アメリカに渡って独特のフィランソロピーへと発展していったわけであるが、現在はヨーロッパにおける民間助成財団の活動はアメリカに比較すると非常に小規模である。さらにそれらの財団の中で国際助成に関心のある財団は少なく、ましてアジアに関連のある助成を何らかの形でやっている財団の数は非常に少ない。このような背景ではアジア関連の助成を行っている財団だけを紹介しても、全体の状況がつかみにくいので、ここでは主要な財団を紹介しながら、アジア関連の助成についても述べることにしたい。

〈イギリス〉

ウェルカム・トラスト——ウェルカム製薬会社の設立者であるウェルカム卿の遺言により1936年に設立され、財団は会社の株を100%所有する。年間予算は約1650万ポンド（約50億円）で医学研究への助成が中心である。助成対象地域は主にイギリス国内で、国際助成は全体の8%にすぎない。アジアでは熱帯医学の分野でインドとタイが対象となっている。

ナフィールド財団——モリス自動車会社のナフィールド卿により1943年に設立された。基金は約2000万ポンド（約60億円）で年間予算は約200万ポンド（約6億

円）。自然科学、医学、社会科学と社会的実験、教育、高齢化問題等に助成し、国際助成は全体の15%で英連邦諸国のみが対象となる。

リヴァーヒューム・トラスト——ユニリヴァー社のリヴァーヒューム卿の遺言により1925年に設立された。資産はユニリヴァー社の持株で、年間予算は約450万ポンド（約14億円）。経営学、経済学、国際関係、教育、人文学、芸術の分野で助成し、国際助成は全体に占める割合は少なく、対象は発展途上国のみで、それも主に英連邦諸国である。

〈オランダ〉

バーナード・ファン・リア財団——ロイヤル・パッケジング・インダストリー・ファン・リア社のバーナード・ファン・リアにより1949年に設立された。財団は同社の株を100%所有する。年間予算は約2000万ギルダ（約14億円）。社会的、文化的に恵まれない子供（0歳～7歳）とその家族のための実験的プロジェクトに助成する。助成対象国は会社が活動している国のみで、助成の90%はオランダ以外の国へなされている。そのうち発展途上国は約45%である。アジアではシンガポール、マレーシア、タイ、日本が対象国となっている。

ヨーロッパ文化財団——1954年にヨーロッパの文化人によりジュネーブに設立されたが、1960年にアムステルダムに移された。財源はオランダのフットボールくじが中心で、年間予算は約1000万ギルダ（約7億円）。マス・メディア、芸術、歴史、建築、考古学、教育、言語、環境、社会問題、社会正義、国際協力等の分野で助成し、ヨーロッパのみが対象となる。

なお今回は訪問できなかったが、オランダにはこのほかにも種々の宝くじを財源とする財団がある。主要なものはベルンハルト王子財団とユリアナ女王財団で、前者は文化関係、後者は社会福祉の分野

で助成を行っている。

〈ドイツ〉

アルフリード・クルップ財団——クルップ社のアルフリード・クルップの遺言により1967年に設立された。財団は産業用機械を製作するクルップ社の総株主である。年間予算は約1500万マルク（約12億円）で、医学、保険、教育、社会科学、文化、スポーツ等に助成する。国際助成は10～20%でポーランド、アメリカ、スーダン、ペルー、ブラジル等に助成している。

フリッツ・ティッセン財団——鉄鋼業のティッセン社のフリッツ・ティッセンの死後その夫人と娘により1959年に設立された。資産はティッセン社の株で、年間予算は約950万マルク（約8億円）。人文学、国際関係、経済、社会、医学、自然科学の分野で、主として国内が対象であるが、多少国際助成も行う。アジアで今までに対象となったのは、インド、スリランカ、ヒマラヤ地域であった。

ロベルト・ボッシュ財団——ロベルト・ボッシュとその家族により1964年に設立された。財団は著名な自動車部品メーカー、ロベルト・ボッシュ社の株を90%所有する。年間予算は約3000万マルク（約24億円）で、保険、社会福祉、国際理解、教育、文化、芸術、社会科学等に助成する。主として国内に助成するが、国際助成ではフランス、ポーランド、アメリカが対象となっている。

フォルクスワーゲン財団——西ドイツ連邦政府とニーダーザクセン州政府により1961年に設立された。戦後両政府の間でフォルクスワーゲン社の所有権をめぐる対立が生じた際、その解決法として、株の60%を売った基金をもとに生まれた財団である。基金は約13億マルク（約1059億円）で年間予算は約1億1500万マルク（約94億円）。社会科学、自然科学、医学、工学の分野に助成する。国際助成は約10%で、全世界を対象とする。アジア関連
(次ページへ)



では現在の優先地域は東南アジアと中国である。

アレクサンダー・フォン・フンボルト財団——1860年にフンボルトの友人が設立したが次第に規模が縮小し、1953年に政府により再建された。年間予算は約4000万マルク（約33億円）で、財源の90%は政府予算である。博士号を有するかそれに準ずる経験のある研究者をドイツに招き、1～2年間研究させるフェローシップを出している。対象となるのは全世界であるが、発展途上国からのフェローは全体の約3分の1で、その中ではアジアからのフェローが比較的多いという結果になっている。

新刊案内

第三世界の文化と財団活動について考えるための一冊——*Philanthropy and Culture*

今から3年以上も前のことになるが、1981年11月にイタリアのベラジオで世界中の財団関係者が集まって5日間の会議がもたれた。主催はロックフェラー財団で、その中心的なテーマは、発展途上国の文化の振興に対して民間財団はどのような役割を果たし得るか、といったものであった。ヨーロッパやアメリカの主だった財団の他、フィリピン、ドミニカ、イスラエル、オーストラリアの財団からも参加があり、日本からは日本国際交流センターとトヨタ財団が出席している。

今回ペンシルバニア大学出版会から刊行された *Philanthropy and Culture* (財団活動と文化) は、この時の報告と討論の内容をまとめたものである。第1部は「アメリカからの視点」としてアメリカの出席者による4件の報告が紹介され、第2部は「国際的な舞台」としてアメリカ以外の出席者による5件の報告が紹介されている。この中の一つは当財団の国際部門プログラムオフィサーである岩本一恵の報告となっている。

いずれの報告も、第三世界への助成活動を行う上で示唆に富む論点が提起されているのではないだろうか。

最近の研究報告書から

当財団の助成研究から、「成果発表助成」によって印刷された最近の報告書をご紹介します。入手ご希望の方は送料分の切手同封の上財団レポート係までお申し込し込み下さい。先着順となりますので、品切れの場合はご容赦下さい。

I-011積雪地舗装道路におけるスパイクタイヤ車粉塵ならびに環境汚染の実態に関する研究 (山科俊郎他、B-5 145頁 和文 送料 250円)

車粉塵公害問題に関する先駆的研究の成果。核融合プラズマ壁相互作用の研究から転用したマイクロ分析手法。各都市の車粉塵の実態調査。各地の野犬の解剖に基づく生体内の粉塵分布の分析。スパイクおよびスパイクレスタイヤの制動効果試験。ヨーロッパ諸国のスパイク問題の現状、などが主な内容。

I-012住環境の国際比較—住宅・土地政策が生活環境形成に果たした役割に関する研究— (早川和男他、B-5 98頁 和文 送料 200円)

日本の住宅政策や都市計画における問題点を、ヨーロッパ諸国との対比を通して明らかにしようとした研究。比較対象国はスウェーデンとイギリス、他に西ドイツ、デンマーク、オランダ、フランスなどにも言及されている。

II-019登校拒否児に関する実証的研究—生活環境と生理的要因を中心として— (神谷克己他、B-5 127頁 和文 送料 200円)

登校拒否児をめぐって実践活動を行ってきた研究者と、社会学、医学(内科学)の専門研究者との共同研究の成果。第1部実践を通して、第2部アンケート調査の

結果から、第3部内分泌の日内変動を診て、第4部登校拒否児発現の社会的背景、などからなる。

III-025石黒信由遺品等高樹文庫資料の総合的研究—江戸時代末期の郷神の学問と技術の文化的社会的意義— 第二輯 (楠瀬勝他、B-5 119頁 和文 送料 250円)

日本が明治維新の急激な社会変化にすばやく対応できた背景には、郷紳レベルの学問水準の高さがあったとされる。幕末の和算家石黒家の天文、測量、暦法等に関する数々の遺品からそのことを実証的に明らかにしようとする研究の、成果報告第二輯。地図や文書の写真等も多数収録されている。

III-026アイヌ生活誌

(アイヌ無形文化伝承保存会編、B-5 279頁 和文 送料 300円)

アイヌの伝承に関する膨大な聞き取り資料の中から生活誌に関する部分をまとめたもの。白老で1名、平取で2名、静内で1名の伝承者の話が、かなりこまかく項目ごとに編集されている。巻末にはカタカナと英語の索引が完備している。

C-007白根火山の観測

(下谷正幸他、B-5 83頁 和文 送料 200円)

第1回研究コンクールで研究奨励賞を受賞した研究についての報告。草津周辺の高校教師など地元の人々が、白根火山の火口湖「湯釜」の水温変化を中心に、火山活動を克明に観測した成果。口絵のカラー写真だけみてもいかに頻繁に調査が行われたか想像できる。

編集後記

▼今回はスペースが少くなりましたので編集後記はお休みです。

トヨタ財団レポート No.31

このレポートを継続してご希望の方は、ハガキにて財団までお申しこみ下さい。

発行日 1985年3月6日
発行所 財団法人 トヨタ財団
発行人 山口日出夫
編集人 久須美雅昭
印刷 真友工芸株式会社